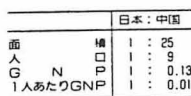


文・橋爪大三郎

もともと巨大な中国のこと。みんながちやうと人並みの暮らしをするだけで、たちまちG N Pは日本を追い抜く。遠からず中国は、世界の超大国に返り咲くだろう――。



|          |     | 日本：中国    |
|----------|-----|----------|
| 面        | 積   | 1 : 25   |
| 人        | 口   | 1 : 9    |
| G        | N P | 1 : 0.13 |
| 1人あたりGNP |     | 1 : 0.01 |

中国と日本の比

中国の人口・GNPの数値は、88年12月統計局発表のもの。日本の人口は、統計庁推計人口資料、GNPは、「88年12月10日現在経済新聞」による。なお、1人あたりGNPは、日本の各GNP数値を人口で割ったもの

橋爪大三郎(はしづめだいさぶろう) 社会学専攻。新著に「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)など。……今月から本学院の講座を担当します、よろしく。

# 土井たか子さん気をつけて 意外にしぶとい自民党の底力

文・橋爪大三郎

七月の参院選には期待した。あんなにドキドキしたのは小学校の、クラス委員の選挙以来じゃないか。(○)君がねばって、あたしも一票入れたのよ。いつも自民党が勝つよりも、やっぱり選挙の結果がわからないほうが面白い。

あまりの大敗に、吹けば飛ぶような野内閣は本当に吹っ飛んでしまい、海部内閣が八月にスタートした。でももちろん、本番は今年度の総選挙。世界中が両陣をのんで、その結果を待ちうけている。

86年の衆参ダブル選挙で、自民党は空前の三百議席を獲得した。同じ有権者が、今回はなれを打って、おたくさんの社会党に鞍替えした。自民党はこころ、国民に愛想つかしをされたのか、いやそもそも、自民党って何だったんだらう。

●保守党が一つしかないのは、なぜ?

昔むかしの大昔、一九五五年のこと。それまで仲の悪かった自由党と、日本民主党が一緒になって、「自由民主」党を作った。どうしてかという、右派左派の社会党が合体して、第一党になりそうだったから。社会党に政権を渡してなるものか。内輪もめなんかしている場合でない、と保守政治家たちはあわてた。

戦前だって「社会主義」政党はあった。が、勢力は微々たるもの。保守政党が乱立したって大丈夫。ところが戦後は、社会党あたりも力をつけている。そこで対抗上、①野党に政権は渡さない、②アメリカと仲よくする、③自由主義経済を守る、この三点でとにかく集まったのが、自民党である。

●派閥があるのは当たり前

もともとカッチリ決まった政策があるわけじゃないから、自民党は現実的に「柔軟に」対応できる。そのかわり、党内の力学はとて複雑だ。特に派閥というものがわかりにくい。

自民党にどうして派閥ができるのか。なんて考えるからわからない。あべこべに、派閥が集まって、自民

党ができて、と考えるとよい。

衆院選は「中選挙区」(定数315)での争い。過半数を取るには、一選挙区あたり2、3人は当選しないといけない。ゆえに自民党の候補陣の、足のひっぱりあいが必要です。

●自民党の支持者がいなくなる?

生活がいちおう安定して、世の中に不平不満の種もなければ、国民は文句を言わない。わが党の政権も安泰なはずだ。——これが、自民党の政治哲学である。そのために、票になりそうな政策をつきつき考え出している、予算もふんづけてきた。

では自民党を支持したのは誰か。

まず農家。戦後の農地改革で、農民は自分の農地を手に入れた。いちおう満足して、もうあまり変化を望まない。しかも自民党は、昔ながらの選挙地盤をひき継いだから、選挙で無類の強さを発揮する。

それと、財界。

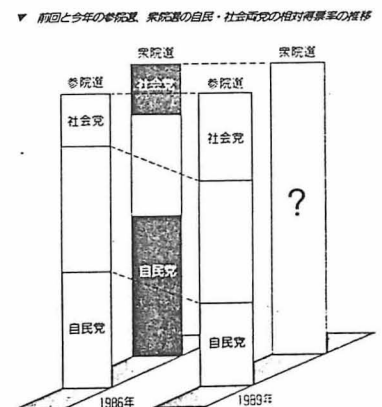
あなたが会社の社長だったとして、自民党と社会党と、どちらを応援しますか? ヨチヨチ歩きの日経経済は、アメリカなしにやれていない。原材料も資本も技術も、みなアメリカにやけていけらう。おまけに日本製品の、最大のお得意さん。なのにソ連や中国のほうばっかり向いている(いた)。社会党では、困るじゃないか——そういう理屈で、どうぞお使い下さいと、企業ぐるみ自民党に献金する。

社会党の支持層はこれと裏返して、都会で働く勤労者

●やむにやまれぬ消費税

かくて生活が安定し、消費文化が開いたせいだか知らないが、若者も主婦も、まんべんなく自民党を支持するようになった。野党なんかお呼びでない。特に中曽根政権下で、支持率はぐんぐん上昇、50%ラインを軽く上回る。消費税はやりませんと約束し、行革のほうもどしどし進めたわけだから、みんな感心したのも当たり前だ。そして選挙で、大勝利。

わが自民党は、とうとう念願の都市型政党に生まれ変わったぞ。そう錯覚したのか、もういいだろうと、消費



が中心である。労働組合員や、サラリーマン。ちょっとインテリで、政治に関心のある人たちは、だいたい社会党に投票することになった。

ところで、戦後社会の変化は目まぐるしい。人びとは都会へ、都会へと出ていった。戦後すぐ、昭和25年には37% (三千七百万人) だった農家人口が、それから四十年近く経った昭和63年には、たったの10% (一千九百万人) に激減してしまう。しかもこのうち、本村に農家で食っているのは、そのまだ半割程度。農村は文字通り、もぬけのカラである。

都会に出て、ひとに雇われて働く、革新政党に票を入れたくなるだらう。だからほっておいても、野党に政権が転がりこむ計算だった。保守陣営は、いや逆転だとマスコミも囁きだした。もうとくに社会党内閣が誕生していいはずである。

そうならなかったのは、なぜだろう。

社会党は、イデオロギー論争に明け暮れて、国民にそれほど向かれた。民社党、公明党といった新都市型政党も現れて、野党が多党化した。その足並みが揃わなくて、野党は頼りない、という評価が定着してしまった。

税を出したために総スカン。おまけに農民は怒り出すし、リクルートはバレーし、宇野首相のスキヤンダルは出る。参院選はあんなに苦しい結果になった。有権者にとっては、向かえよう、と自民党は、消費税にこだわっている。先のことを考えると、ほかに手はないのかもしれない。

問題は財源だ。高度成長の頃なら、どんどん税金が入ってきた。税率は累進課税から、物価につられて名目賃金がアップすると、自動的に税収も増える仕組みになっていた。安定成長になってからは、仕方がないから国債(要するに借金)に頼った。そのツケが山ほどたまって80年代には、財政再建・行政改革待ったなしになってしまった。

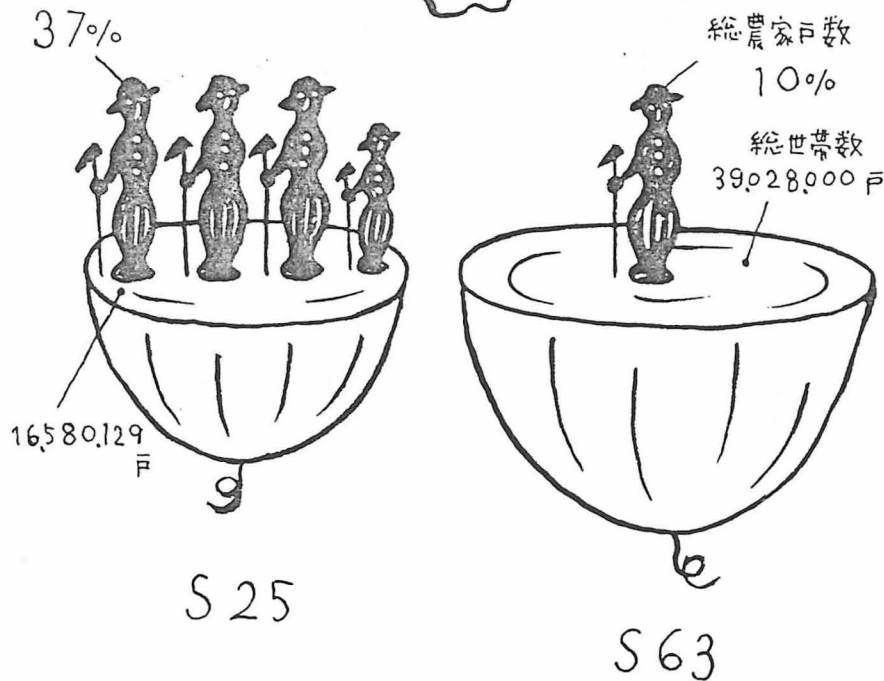
税金が足りない。ではどうする? サラリーマンにこれ以上払えと言っても無理。農家はもとと税金をほとんど払っていない。その上、米価引下げや農産物自由化で、それどころでない。いっぽう歳出を切りつめようにも、防衛費はアメリカの手前、削れない。福祉をばっさり切り捨てれば、政権の土台も危うくなる。行革・民話もここが限度。仕方がないからうらみつきに、全国民からまんべんなく集める「消費税」の導入となったわけだ。

●思い切った党改革をすれば、国民は支持する

今度はいちおう社会党にしよう、と思つたあなたも多しはず。何しろ参院選で、社会党の得票は一挙に倍増したのだ(比例区)。ただしあなたが、つぎの総選挙で、やっぱり社会党ね、と思うかどうかはわからない。野党に政治を任せてみよう、と思つている国民はまだ多くない。

「国民を騙して消費税を導入したのは、自民党が悪い。だから待たせかけました。けど社会党は、先のこまでちゃんと考えているのか。もう少し現実的になつてほしい。」自民党は、消費税が国民のために必要だと思つたら、時間をかけてよく説明したらいい。そのために国会があるのです。社会党はきちんと対策をしてくださいますか。

——これが国民の、つぶやきではないだろうか。それにひきかえ、いまの政治はあまりにも貧しい。小手先のこまかきでなく、本気で生まれ変わって国民にわかりやすい政治をしようという政党なら、国民は支持しますよ。有権者の目は肥えている、もつとまじめにやりなさい。



▲昭和63年と昭和86年の農家人口の比  
農家人口は、農林水産省「日本長期統計」(昭和63年農林水産省統計表)の自家農業従事者数と自営農家より算出(昭和86年国勢調査農家)により総世帯数を参照して算出。参院選の得票率は、自治省選挙区資料より比例区も選挙区の得票率を平均して算出。なお、相対得票率は、選挙における各政党得票数中に占める各党の得票数の割合のこと。(対して、有権者総数中に占める各党の得票数の割合を絶対得票率という。)

橋爪大三郎 (はしづめ だいさぶろう)  
社会学者。著書に「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)「はじめての構造主義」(講談社現代新書)など。……土井たか子さんは「山が動いている」と言いましたが、これから選挙の主役は女性。政治のわかるあなたの出番です。

1989-20 3/6

国際化が聞いてあきれる

# 難民船におどおど日本は何という島国だ

文・橋爪大三郎

アトキンスから六本木、乃木坂、青山通りを曲がって外苑前、表参道へ。……この界隈を歩くと、「一瞬ここが日本なの？」と思ってしまう。ふと耳にするだけでも世界各地の言葉が飛びかう。東京のなかの国際都市だ。それもそのはず、この港区は「外人」の町。区民18万6千人のうち6.3%、約1万2千人が外国人なのだ。この四、五年で日本経済は、またた回りくわいの巨大になった。このチャンスに逃すものかと、アタッシュケイス片手に世界中から、ビジネスマンやビジネスウーマンが乗りこんでくる。OA機器も置かないといけない。当然、オフィスが足りなくなる。それを補うために、「地上げ屋」が活躍し、東京の地価は4倍には上がった。●もうひとつの国際都市・池袋

港区が光の部分なら、そこから北へ直線距離で数kmの豊島区に、もうひとつの外国人街がある。ターミナル池袋駅を中心とする、東西のアーバートに、海外から「出稼ぎ」の人びとが暮らす街。中国、フィリピン、ブラジル、……。みな、本国でかえられない夢を追って、はるばる海を渡って来た人々だ。建設現場や、飲食店の下働きなど、近頃の日本人が敬遠する仕事も、いとわすこす。慢性的な人手不足の日本は、もうそろそろ彼らなしではやっていけない。

●豊島区の外国人急増はすさまじい。2年まえの2倍の、約1万5千人。東武池袋線を走る外国人は約2万人。5年前に比べ、約8万人の増加だ。このほか、観光ビザなどで入国し、そのまま働いている「不法就労者」だって、何万人いるか見当もつかない。どうりで地下鉄や街角で、外国人をよく見かけるはずだ。

●水が低きに流れるように  
ひと足先にヨーロッパは、出稼ぎ外国人の洪水だ。かつて植民地をかえ、第三世界とつながりの深かった各国のこと。豊かになるにつれ、人手(単純労働力)が足りなくなった。そこで西ドイツなどは、ギリシャやトルコから大勢雇入れたわけだが、現在、その人びとが百六十万も住みついている。人手は欲しいし水住してものも困る、というジレンマに悩んでいる。

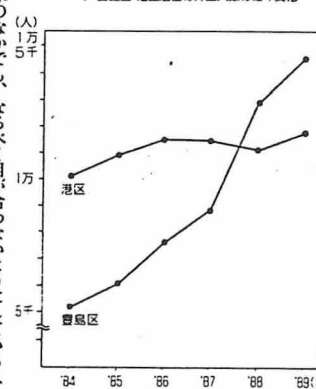
●日本も昔は出稼ぎだったけれど  
物価はとにかく高い。そのせいで毎年、海外に8百万人も送り出すのだから、入れ替わりに出稼ぎの人びとがこつこつ入ってきたって、なんの不思議もない。そのことが表沙汰になったのが、今度の難民騒動だ。日本は周りが海なので、入るなと拒んでもそれは無理。相手も命がけだから、鬼か冷血漢にでもならない限り、どうしたって受け入れざるをえない。ということがわかって、何だか心配になった。

●日本も昔は出稼ぎだったけれど  
ばんばん輸出しきって、日本だけ繁栄するなんて、話がかみ合わない。麻雀の一人勝ちみたいで、気がつかない世界が白目で見ている。外国とお付き合いする、何のプランもなかったから、いまこころ慌てる破目になった。

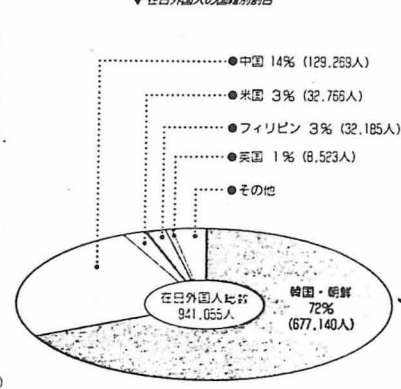
●頭を冷やして、少し昔を思い出してみたい。  
貧しくて、人口過剰で、海外をめざす日本人が大勢いた。アメリカへ、ブラジルへ、そして満州へ。たとえ先方から歓迎されなくても、裸一貫、やむにやまれず世界中に出ていったではないか。それはかりでない。戦争で人手不足になると、今度は

●日本に限って、そうはならんぞ。  
しかも異質な文化の侵入を嫌いますから。……数年前まで、専門家がその口を揃えていた。だから日本人は、まさか外国人が大挙押しよせてくるなんて、思ってもみなかった。  
●そこへ、難民船の殺到である。  
サイゴン(いまのホーチミン市)が陥落し、南ベトナムが崩壊したのは一九七五年。そのあと、飛行機で外国に逃げ出せなかった人たちが何万人も、ボートでベトナムとなつて南シナ海を漂流し、難破したり海賊に襲われたりしながら外国をめざした。それも昔語りになった数年前から、難民船が今度は、北の海をめざすようになり、そして一部が、九州あたりの海岸に漂着しはじめたのである。

▼難民船・海客の外国人の経年変化



▼在日外国人の国籍別割合



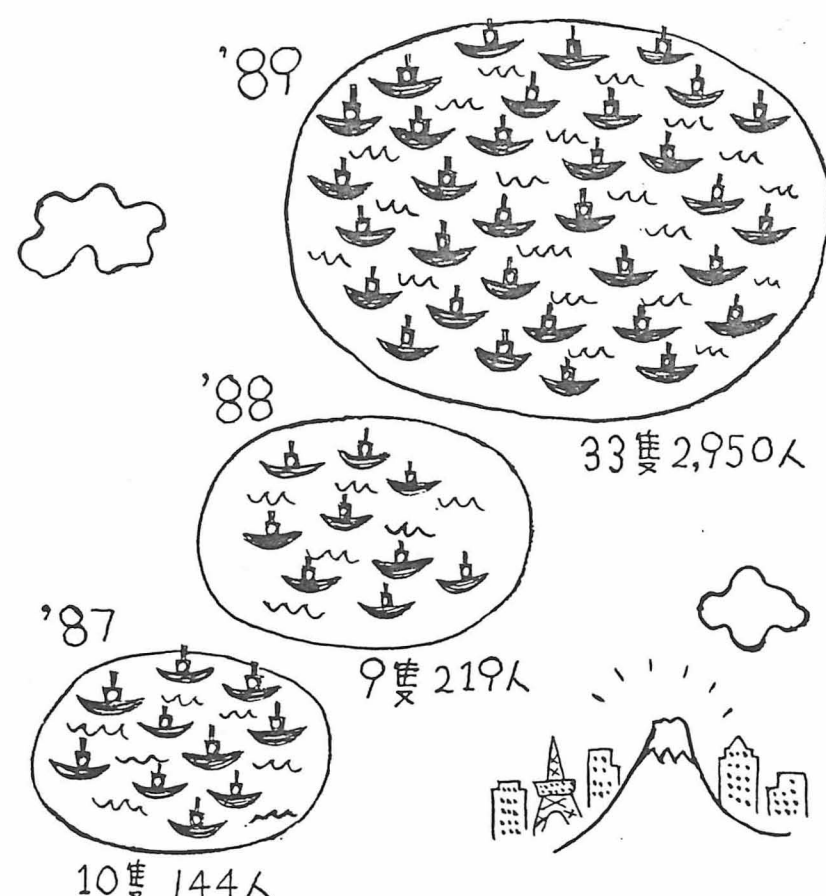
●グッチダヴィンチだ、エルメスだ、大騒ぎのブランド・ブームが五、六年間、激しい高潮ののちで、海外旅行もどこまでか前になつた。ちよつと貯金を下ろせば、そこそこリッチな旅もできる。ショッピングもまた楽し。日本でお給料貰って海外で使う、これが賢いやり方なのよ。  
——と日本人が言っていたころ、海の向うでも同じことを考える。日本で働ければ、なんていいだろう。日本の

●朝鮮半島から無理やり人間をつれて来た、つらい労働のあけく、終戦のときまで故国に帰らなかった。いまも日本に待たす人びとが(子孫を含めて)百万人ちかくいる。さんざんそういう勝手をしてきたから、日本人は誰も責任をとっていない。  
●外国人も日本社会の一員として、対等に活躍してもらおう——なんて、恥ずかしながら、日本人は考えたことがない。税金はとられ、選挙権はない、公務員にもなつてくれない、という態度。おまけに、3年に一回、指紋を押さなければならない。みんな憤慨している。外国で活躍し、その地に骨を埋める日本人も多いのだから、外国出身の人びとも、日本の社会で安心して活躍できる条件を整えるくらい、当たり前じゃないですか。

●やるべきことはいろいろある。  
日本政府にも困つたものだが、ひとのせいばかりしないで、自分たちも考えよう。  
●日本みたくに政治も経済も安定していると、世界中こんなものだらけ。つまり思いがちな。ところがどっこい、社会主義や第三世界を見てもわかるとおり、順調どころでない国がほとんどなのだ。だから日本が、国際的な責任を求められなければならない。

●じゃあ、何をすればいいの。  
たとえば、外国への投資、人びとの働くチャンスを作り出し、無理のない経済成長をうながすよう、じつくり腰をすえて協力する。むろん、その国の政府や、アメリカ、E.C.の国々ともよく相談して、きめ細かな手を打とう。遠まわりのようだが、難民を事前に予防するには、これが正攻法なのである。

●外国からの労働者も、計画的に受け入れよう。長い目でみて、補給したあと、その国の経済の中核となるべき人びとである。人数や労働条件が妥協の必要のない、両国の利益になること。とにかく現状は、ひどすぎる。日本が政府が労働者のビザを出さないで、別な名目(来日し、不法に働かざるをえない。モクリの労働市場だから賃金も安いし、危険も多い。人権問題だし、犯罪にも巻きこまれやすい。そういう裏面がいややめて、相手国との取り決めに基つき、堂々と受け入れたほうがいい。このところ、難民騒ぎも一段落みだ。喉元すずれば忘れてしまふ日本人が多いが、今のうちに、外国との付き合い方をしっかり考えておかねばならない。これを、わが社会科学者の皆さんにお願いします。



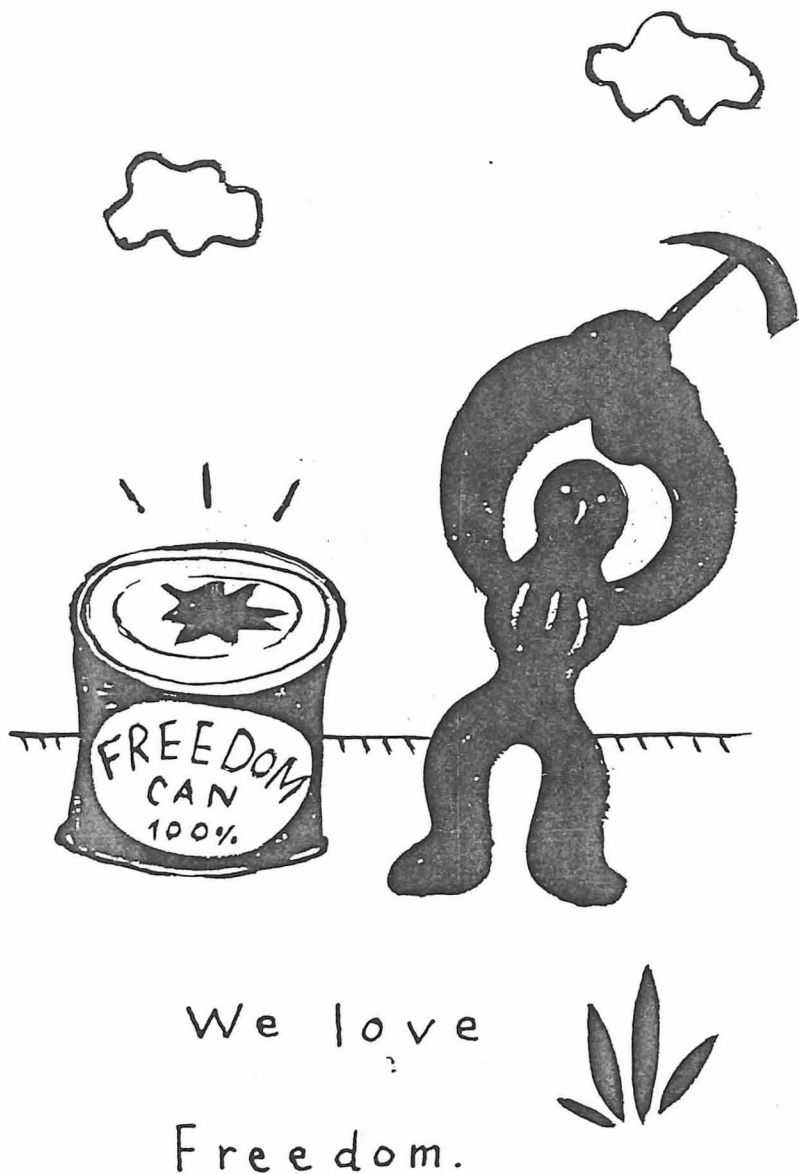
▲日本に到着した過去3年間の難民船の数と難民数  
イラストグラフ中の数字(難民船及び難民数)は、外務省外国人統計による'89年9月26日現在の数字。また、難民船・海客の外国人数は、住民基本台帳による世帯と人口で、外国人登録法により記載されている数字である。在日外国人の国籍別割合の数字は、総務省統計局の統計資料の数値を元に作成している。

橋爪大三郎 (はしづめ だいさぶろう)  
10年あまり在野で社会学を研究。'89年から東京工業大学でも教壇に。「仏教の言説戦略」(勁草書房)「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)などの著書がある。……留学生の友人たちが、日本を外から見ることの大切さを教えてくれます。



# 今だからもつと知りたい 共産主義をイロハからわかつてしまおう

文・橋爪大三郎



一九八九年は、ほんとにいろんなことがあった。世界史でもそのうち「ヒドク、ハク、天安門」とか、「ポーランド、センキョ、ヤク」立たず共産党」とか習うようなあ、きつと。東欧の社会主義が、こんなに急にガタガタになるなんて、一年前には予想もつかなかった。

東ヨーロッパはやっぱり「速い」。でも、とても重大なことが起こっているのはわかる。歴史の大きな節目がやってきた。片時も目が離せないけれど、共産主義のことをいとおぼろしく理解してない、ニュースもひとつピンとこない。そこで今回は、学校でもなかなか教えない、なかつた、共産主義に入門してしまおう。

●共産主義と、社会主義を「つちやにしないように」

社会主義？ マルクス主義？ 共産主義？ まさかわしい言葉がいろいろあって、こんがらがるといけなから、まず交通整理。

このなかでは社会主義が、いちばん意味が広い。人間は本来、平等のはず。親のいない子、お年寄り、重い病気の、……とにかく「弱者」には手を差し伸べよう、というのが社会主義の精神。その財源は、国がまかなう。なんなら、金持ちからこつり税金を取り立てたついでに、それを目的に政府をつくらば、「社会主義政権」である。

次にマルクス主義は、文字どおり、マルクスという人が考えた思想のこと。ただの社会主義より生ぬるい、共産主義まで行かないとだめだ、と彼は主張した。

その共産主義とは、私有財産の制度をなくしてしまおう、という考え方をいう。金持ちと貧乏人ができるのも、世の中の不公平がなくなるのも、個人が財産を持てない。いっそのことを禁止してしまえばいい、という思想である。

共産主義は、理想的な共同体（コミュニティ）を作ることとをめざす。昔からそう考える人は大勢いたが、マルクスがあまりにも有名になったので、ふつうに共産主義と言つと、マルクス主義をさす場合が多い。

●「資本論」を書いたマルクスは偉かった

産業革命の荒波にもまれた十九世紀のヨーロッパで、労働者は「女工哀史」さながらの、苦しみをなめくしていた。これを何とかしようと、いろんな社会主義者が現れたが、そのピカ一がマルクスである。

カール・マルクス（1818～1883）。ドイツ生まれの思想家、革命家。ユダヤ系で、差別に人一倍敏感だった彼は、社会の矛盾をつきつめて考えていった。それも口先だけでなく、独学で経済学をみっちり勉強して、「資本論」という歴史に残る巨著を書き上げた。

どうして資本家はじやんじやん儲かるのに、労働者の生活は楽にならないの？ 疑問に思つたマルクスは、その秘密が、労働力の市場にあるとした。

たとえばあなたが、ハンバーガー・ショップで、時給500円で働いたとします。この額をきりぎり衣食住をまかなつてやつていく。でも、500円で売り渡したあなたの労働力は、実は500円より大きな価値を生み出している。その証拠に、会社は儲かっているでしょう。つまり、労働の価値はあなたの労働力の使用で、労働力の価値はあなたの賃金、なのだ。この差額分を、剰余価値という。それが資本家のものになる。つまり、労働者が搾取されるのが、資本主義なんだ。

マルクスは、その先も考えた。

この地上から搾取をなくさない限り、人類の幸せはやつてこない。資本主義社会は、資本家の世の中。生産手段（工場やビルや船や）はみんな、資本家が所有している。彼らはそれを手放さないだろうから、結局儲けで取り上げるしかない。

思えば人類の歴史は、階級闘争の歴史だった（この見方を、唯物史観という）。でもいま労働者が命をかけて立ち上がつて、資本家をやつてくれば、今度はその階級のない、ほんとうの平和な社会がやつてくるだろう……。

そう信じたマルクスは、同志を集めて、革命を起こそうとした。

●東欧諸国の現状比較

| 正式国名              | 憲法政体                        | 議会の自由 | 報道の自由 | 国外旅行 | インフレ率    |
|-------------------|-----------------------------|-------|-------|------|----------|
| ソビエト社会主義共和国連邦     | 共産党が唯一政党。複数政党に移る。なし         | ○     | ☆     | ☆    | 6-8%     |
| ポーランド人民共和国        | 統一労働者党(共産党) (1989.4月より複数政党) | ○     | ○     | ○    | 360%     |
| ハンガリー人民共和国        | ハンガリー社会党。複数政党に移る            | ○     | ○     | ○    | 16%      |
| ドイツ民主共和国(東独)      | 社会主義統一党(共産党)の事実上一党支配        | ○     | ☆     | ○    | 2-2.8%   |
| チェコスロバキア社会主義共和国   | 共産党の一元支配。複数政党に移る            | ○     | ☆     | ○    | 5-7%     |
| ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国 | 共産主義者同盟の一元支配。複数政党に移る        | ○     | ○     | ○    | 1000%以上  |
| ブルガリア人民共和国        | 一党独裁を放棄し、複数政党に移る            | ○     | ○     | ○    | 0.5%(81) |
| ルーマニア人民共和国        | ルーマニア共産党の一元独裁               | ○     | ○     | ○    | 原則0      |

○一定の自由 ○一定の自由または事実上の自由 ×厳しい制限 無制限がある 全一党独裁

●「レニンが共産党をつくつた」

マルクスの予想だと、産業化の進んだイギリスかドイツで、まず革命が起こるはずだった。ところが案に相違して、革命の起こつたのは、発展途上のロシア。その立役者が、マルクスの後継者を自任するレニンである。レニン（1870-1924）は根拠からの革命家で、ロシアの秘密警察と互角にたたかえる組織をつくり上げた。そして革命を成功させた。でもでまがった共産党は、上の命令を聞くいっぽうで、ちつと民主的でない、どうみても秘密警察をつくりである。でも革命なんだから仕方がない、当時はみんな我慢していた。

●「共産主義」の定義

レニンはロシアの実情に合わせて手直ししたマルクス主義を、マルクス・レーニン主義という。

こうしてソ連が出来たのが70年前の、一九一七年。続けて世界革命をめざそうと、モスクワに総司令部「共産主義インターナショナル」も出来た。中国や日本や、世界各国に、その支部「共産党」が作られた。

それでも第二次世界大戦が終わるまで、社会主義の国はソ連だけだった。レーニンが病死したあと、替わつて出たスターリンは、世界革命を棚上げに、国内を引き締めて、社会主義建設につとめた。そして、さっきの総司令部（第三インター）も、一九四三年に解散してしまふ。東欧の社会主義政権は、その後にはきたので、「共産党」という名前をつけていない党が多い。

●東欧はもともと、中央ヨーロッパだった

さて、ナチス・ドイツに占領されていたのを、ソ連に「解放」してもらつた東欧諸国は、今度はマルクス・レーニン主義を押しつけられ、ソ連の衛星国に甘んじることになった。内心これが、嫌で嫌でたまらない。でも、うつかりそんな素振りを見せると、56年のハンガリー動乱、68年のチェコスロバキアのワルシャワ条約軍の戦車が入つてきて、つぶされてしまふ。だから、おとなしくしていかないとダメだ。でも、そうこうしているうちに、だんだん経済もじり貧になり、ヨーロッパの「逆境」にたいにうらさびれてしまつた。

もともと、ハンガリーやチェコあたりは、ヨーロッパのそれぞ、ど真ん中だったのである。今世紀の初めころ、東ヨーロッパの文化水準の高さといつたら、そりや

●「レニンが共産党をつくつた」

ソ連も本音は、同じである。東欧諸国がかえつて足手まといになり、西側諸国との差は開くばかり。それだけではない。社会主義は優れたシステムというところになつていったのに、西側の資本主義国のほうが労働者がいい暮らしができる。なんてことが証明されたら、マルクス・レーニン主義の土台が吹っこんでしまふ。

社会主義計画経済は、どがよいことになつてきたのか。昔はこんなふうに説明した。①まず、計画経済のほうが合理的で、無駄がないだろう。景気不景気の波もないし、倒産・失業もない。②それに、資本家がいなければ、搾取もない。だからよりよい生活が送れるはずだ。——ところが、実際はその反対。経済は非効率で、無駄ばかり。肉とかパンとか行儀とか、生活物資がなくて、すぐ行列。おまけに幹部が特権を独占して、平等とはほど遠い。これでは誰だって、資本主義のほうがずっとまし、と思つたろう。

●「レニンが共産党をつくつた」

一般の国民は、共産党の政治にうらやましている。ゴルバチョフみたいに、国の将来を真剣に考えている政治家も、改革・自由化以外に道はないことを知っている。でも、俺たちの特権を手放すくらいなら、ベレストロイカの足を引っ張つてやれ、と思つている共産党の幹部連中（メンクラツラという）もごちゃまぜ。彼らに比べると、改革派はまだ少数派。党内闘争で負けてしまふかもしれない。

だからすべては、改革派が多くの国民の支持を得られるかどうかにかつていて。それには、政治の自由化、たとえば自由選挙の導入も必要だろう。改革派がそれをやりとげるか、それとも、共産党の保守派にねじふせられてしまふのか、問もなく正念場がやつてくる。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう) 社会学者。著書に「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)「はじめての構造主義」(講談社現代新書)など……女性誌というものを跳んでみて、何とまったりした小宇宙だ、と思ひました。そこに空いた風穴みたいなコラムでありたいです。





